



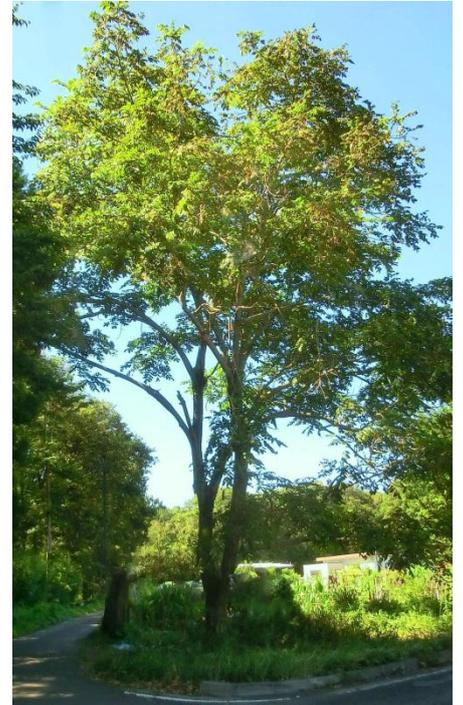
木もれびの森の樹木(21)

市道の古淵麻溝台線沿いの木もれびの森の一面に畑が展開しているところがありますが、道路と畑の間にオニグルミの高木を見ることができます。幹周りは174cmもあり、見事な樹形です。

オニグルミ(鬼胡桃)はクルミ科クルミ属で北海道から九州まで日当たりの良い河原等に生えている落葉高木です。日当たりが良いと成長がとても早く、若いうちは一年で50cm以上も伸びるが10年ほどで成長の勢いが続かず成長は遅くなります。樹形は横広がり、樹冠はまるく、樹皮は灰色で縦に裂けます。花は雌雄同株で開花は4～6月。雄花は細長く垂れ下がり、長さ10～25cm。雌花は枝の先端に上向きとなり、長さ5～15cmほどです。葉は互生、奇数羽状複葉で長さ40～60cm、小葉は11～19枚ほどあります、葉裏は毛が生えていてよくざらつくことが特徴です。果実は9～10月に熟し、核はかたくて厚い皮に覆われ、中に脂肪分の多い種子があり食べられる部分です。

一般にクルミと呼ばれているのは、からの薄い栽培種ですが、オニグルミは野生種です。用途は優良な家具材、建築材や銃床にも使われ。また、堅果を砕いてタイヤに混ぜ、スリップ止めにもなります

このオニグルミのそばに**ヤマグワ**の高木(幹周り 167cm)が生えていましたが、この春伐採されました。ヤマグワはクワ科クワ属で森の周辺のあちこちに低木が生えていますが、高木は希少だったので少々残念な気がします。(林)



オニグルミの大木
(左はヤマグワの切り株)

木もれびの森の野鳥たち

9月

<危険をくぐりぬけて若鳥に !! >

蝉しぐれ、最後を締めくくるのはツクツクボウシ。森はまだ、セミの大合唱が続きそう。夏の間はトンボやチョウも飛び交い、地面では、シデムシやアオオサムシたちが死んだ虫に集まり、お掃除屋です。クワガタムシやカブトムシの食べられた跡もあり、食う、食われて自然に還る世界がそこにはありました。

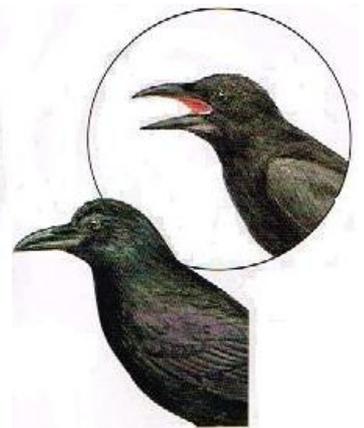
さて、木もれびの森に暮らす野鳥たちも例外ではなく、巣立ち前後のヒナはヘビやカラスに狙われます。木に掛けられたシジュウカラ用の巣箱からヘビが顔を出していることも。また、カラスは小鳥がヒナへのエサ運びする場所をチェックし、ヒナを狙ったりします。でも、カラスも子育て中かもしれません。

秋を前に、いま元気に飛び回っているエナガ・シジュウカラ・メジロ・ヤマガラ・コゲラは、暑さを乗り切り、たくさんの危険から運よく逃れ、生き延びることが出来た若鳥たちです。

7月の初めまで鳴いていたウグイスやモズは、この森で子育てをしたのでしょうか？



ヒヨドリの子



ハシブトガラスの子

子育てが少し遅いヒヨドリは、8月に入ってから、森のあちこちに産毛をつけた巣立ちビナが親と一緒にいました。ヒヨドリは巣立ち直後、まだ飛ぶ力がとても弱く、しばらくは親の助けが必要となるようです。秋は、野鳥たちにとって渡りや移動の季節。山から下りてくる鳥、南の国へ帰る鳥。そんな鳥たちにとっても木もれびの森は、大切な休息と栄養補給の地。木々の実も鳥に食べてもらって、種を遠くに運んでもらおうと、目立つ赤や黒で実を装います。(瀬尾)

木もれびの森の虫たち

木もれびの森は花を訪れる虫たち、樹液を訪れる虫たち、冬でも活動する虫たちで一年中賑わっています。

そんな中から今回は色彩や紋様が興味深いものを紹介します。(大川)

オオミズアオ (ヤママユガ科)	薄いメロン色の大きくて美しい蛾。蝶と蛾は同じ鱗翅目で、区別は困難です。偏見なしで鑑賞したいものです。日中は林内の下草層で見かけることも多いです。
エサキモンキツノカメムシ (ツノカメムシ科)	背中に黄色のハートマークが目立ちます。ミズキの葉にいたことが多く、子育てすることが知られています。あくまでもカメムシですのでご注意ください。
アカガネサルハムシ (ハムシ科)	サイズは小さくても色彩は世界一美しい甲虫と言われるニジイロクワガタに匹敵？食草であるブドウ科のエビヅル、ヤブガラシなどで見かけます。
アオオサムシ (オサムシ科)	メタリックグリーンの飛ぶのやめた甲虫(後翅が退化)。日中は落ち葉の下などに潜み、夜間徘徊しミミズなどを捕食。手塚治虫氏のペンネームの由来の昆虫です。
アケビコノハの幼虫 (ヤガ科)	目玉紋様がドキッとさせる色彩豊かな芋虫。目玉紋様と独特のポーズ(写真)で捕食者を威嚇？一度見ると忘れられない？紋様は共通ですが色彩は多様です。



オオミズアオ



エサキモンキツノカメムシ



アカガネサルハムシ



アオオサムシ



アケビコノハ幼虫